（昭和五年五月二十四日第三種郵便物認可）　昭和九年八月十五日　千曲時報　第五十三號　（一）

毎月一回十五日發行（定價一部五錢一年郵税共五十錢）

編輯兼發行人　香山清和
發行所　千曲會　長野縣上田市
印刷所　中澤印刷所　長野縣上田市町

長野縣上田蠶絲專門學校

生絲生産制限是非

絲價の暴落は餘りに桁外れである。誰の豫想をも完全に裏切つて了つた。春蠶の當時製絲家の强い算盤玉は決してこう彈きはしない。寧ろ昨年の損失をどの程度に埋めることが出來るかと云ふ額の大小が問題であつた。然るに絲價は秋の陽の如く釣瓶落しに直下して、蠶絲業界にすつかり光明を絶つて終つた。今日ではどうやら此の暗黑界を背定し暗中模索の感がある。内地の機業家でさへ之れ以下に下ることは大に迷惑だと悲鳴を揚げて居るとのことである。往年の米國機業者の全く同じ嘆聲を思ひ合はせて今昔の感に堪えない。

養蠶家の苦腦は問はずも哉である。たゞ呆然と拱手して繭價を見送るのみである。見送りのストライクは三度重なれば卽ち三振死となる。今日の定石では捕手の如何に不拘三振は死と相場が定つて居る。

凡そ生絲に關係あるものは斯くの如く國を擧げて刻苦に喘いで居るから今回政府が救急の施設を講じたわけであらう。製絲家に對する低資融通は別として養蠶家救急の施設は卽ち生産制限である。よしかゝる方法を講じなくとも自然的に生産は制限されると思ふが今回の案たる制限に急速な拍車をかけたものたることは疑ひない。吾等が最も憂ふる所は此の生産制限によつて生ずる人絹との關係が如何に將來の生絲消費に響くかと云ふことである。今日、絲價低落の原因は一にして足るまいが人絹の跳梁跋扈が其の最たるものであらう。折角日本の生絲が世界の各地に浸潤して末梢的な毛細管に迄入りこんだものが人絹に置換されたとしたら將來どうなるか！

如何なる力を以つてしても盛返へすことは困難と見て誤りあるまい。現在生絲の價格は決して彼等に對抗して高いものではない。二十掛近くの安値に甘んずるならば現在の生産線を死守して人絹に備へなければなるまい。實際主養蠶地では斯くの如き安値でさへ他に替るべき現金收入の道がないものである。

其所で私は制限と云ふ消極的な國策よりも消費と云ふ積極的な國策を講ずるのが眞の國策だと信ずる。國外に向つて行ふことが出來なければ國内だけでもよろしい。日本が農國本を國是とするならば大手筋の羊毛や人絹の資本主義的生産者に煩はされずに農家を生かすべき國策を講ずべきものではないか。そして其の方法は幾等もあると信ずる。農家も亦石に嚙りついても生産を落さず萬已むなければより以上安値にしても第一線を退かないで居るべきである。國家は高所から見て養蠶望みなしとするならば先づ『農國本』の看板を下ろして前途の方法を講ずべきである。

製絲科の卒業生に檄す

奈良　藤井料

千曲會員中約半數を占むる、製絲科卒業生に本文を呈し、御高敎を仰がんとするものである。

○

過般全國商工會議所會頭會議に於て蠶絲業更生策が講ぜられた折、その決議中に繭の乾燥、生絲の製造、及び生絲の貿易に關する事業をして農林省より離脱せしめ商工省に移管せしめよとの一項があつた。誠に千思万考に價すべき事項であるのである。

我々製絲業に關係する者は常に養蠶關係者と接觸より以上に機織關係者との接觸聯索を希望し來つたものであつた。其の希望が輿論として表はれた事を悦ぶものである。

元來蠶絲業は農家の副業として發達し來りたる經歷を有すると同時に製絲工場もその事業の性質上從來農村に偏在し工業的色彩を帶ぶる事が洵に渺なかつたので我も人も製絲業は蠶業の一分科であると心得て居つたものである。

然るに今や乾繭取引の强制が提唱せられ、繭の格付の普及發達が要望せられ且つ又製絲業法による統制が主張されろ今日であるを以て吾々製絲關係者の勇往邁進すべき� であるのである。

○

我邦蠶絲業の無統制は農蠶業を主とし製絲業を從として取扱ひしに始まる。

元來蠶絲業は生絲製出によりて始めてその使命の一端を果し得るものであつて繭の生産によりては何等の國家的貢献をなし得べきものではないのである。

故に製絲業を基礎としたる統制策が講ぜられぬ以上蠶絲業統制は百案ありと言へども彼岸に到達し得ぬのである。

然るに我々の言ふ所の製絲技術は養蠶專攻者に據つて容易に代行せられ得る程度の淺薄なるものであるが爲め、往々その主客轉倒の行政が行はれ來つたのである。

○

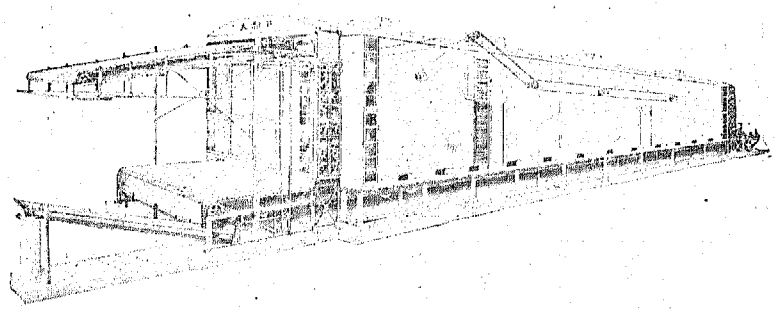
於茲我々は我々が學窓にありて何を學び何を得しかに付き沈思默考すべきである。我々製絲技術者の有する技術は他の建築、機械又は電氣技術者の如く絶對不可侵の技術なりや否や。

官廳の指導員としては先づ足りなむ。然れども實際工場の技術者としての權威を保持し得るやを考ふる時寒心に堪えざるものありとするは否なまれぬ。

專門學校卒業者は人格に於て又常識に於てその道の小僧上りよりは優れりとす

山本三六郎著
化學純絹絲の工業的完成　¥0.30
蠶絲科學研究會編
伊太利蠶絲絹業の衰退原因と其現況　¥1.50
菅原勇治著
改正蠶絲業法規要論　¥2.30
發行所　蠶絲科學研究會
市田上縣野長
〔振替長野6413番〕

現代乾繭機界ノ王座
大和式自動輸送乾繭機
一九三四年代表型
【製錄贈呈】



營業課目
特許大和式自動輸送乾燥機
特許帶川三光式乾燥裝置
特許やまゼホイロ
特許大和式熱湯自動還元機
特許水野式改良ロストル
特許アイエム.コールセンダー
特許アイエム.ストーカー

製作發賣元
株式會社
大和三光商會
東京京橋區京橋三丁目二番地
電話京橋(56)五三二〇番

るのが目下坊間に於ける定評である、我が製絲技術者中にも絶對不可侵の技術者なしとは斷じ難きも其の多くはたゞ單に百姓的實驗が成功して發明となり發見となりし偶發性のものにして其の學術的發明の大部分は農業學者又は工業學者によりてなされて居る實情を凝視すべきである。

○

『我々は學窓に於て何を學んだか』とは我々の常に考へさせられる事である。この解決は製絲科卒業生をして現在の定評に甘んぜしむるか或は拳頭一歩を進め工業技術家の卵として校門を送り出すか將又未來の支配階級を目して教育すべきかにある。攤つて二十回に亘る卒業生の活動狀況を精査するに、前記の如く技術者としての權威者は實に寥々たるものである。寧ろ支配者としての活動を囑目されて居るものは相當多數に上つてゐる事實に徴し、製絲科の學科をして經濟學的色彩を濃厚ならしめその科名も蠶絲經濟科と改稱し養蠶、製絲並に紡織に關する學科は之を從とし後日研討に資する程度に止め專ら商工業に關する經濟學を治めしめ農學に於ては養蠶專攻者に讓り工學に於ては紡織專攻者に遜色ある製絲專攻者をして新生面を拓き以つて蠶絲業界の統率者として活躍すべき他日を期すべく學校當局に提言せむとするものである。

（七月十七日佐保河畔寓居にて記す）

千枚漫語

千葉　高島生

○

今後の蠶絲對策は、優品の安値主義が根本だと云ふ其の口で、繭が安い生絲が安い、何とかして呉れと云ふ――理論が一貫してゐない。理論が一貫してゐないから、一貫した蠶絲對策が生れて來ない……（蠶種聯合通信七月號展望台）

○

夏秋蠶對策の問題は、議論としては色々と考へ方があつても、『まあ名案はないね』と云ふことになる。あつても一時のがれの姑息手段しかない。之は丁度、資産家が沒落に向つてゐる時の狀態に非常によく似てゐる。借金取りが來たら誰かに借りて一時を凌ぎ、次の債權者が來たら何とか言譯をして支拂を延ばして貰ふと云つて家運に挽回すべき成案もない――と云つた場合にどこか相通ずるところがある。（蠶絲界報八月號まるのうちから）

○

蠶絲業の非常時局に際會して、如上の二句は、實によく時流を諷し得た名言であると思ふ。

○

未曾有の難局にある蠶絲業が、果して一時的の不況か、はた沒落過程を辿りつゝあるのか。前者を信ずる者は天絹の優越性に重點を置き、アメリカの不況が打開されさへすれば立ち直ると謂ひ、絹物の消費を宣傳し、新販路の開拓と、新規用途の發見を對策として説く。又後者の説をなす者は、人絹の恐るべき發展に重點を置き、蠶絲業の沒落は殷鑑遠からず藍や樟腦にあると謂ふ。

果して何れが眞乎。

○

玆に瀕死の大病人がある。到底助かりさうもないが、時に依つて熱も下り、脈も正調になつて、食慾の進む日があると何だか順に快方に向つて丈夫になれさうな氣がする。併し又容態が悪くなると、この儘起てなくなるのではないかと悲觀して了ふ――數年來の蠶絲業は丁度この瀕死の病人に譬へることも出來よう。たゞ其の病氣が肺結核の如く養生の如何に依つては快復の見込があるのか、胃癌のやうに全然致命的の重患であつて、たゞ氣休めの手當をして死期を待つに過ぎないのであるか。其れを適確に診斷する名醫はなく、否あるかも知れないが、病人に對して直接死の宣告を下すことを躊躇して居る向もあらう。

○

然らば千枚子自身は何れの説を採るか？、前農林大臣後藤氏の議會に於ける答辯をその儘、悲觀もしなければ樂觀もしない。謂ふ言葉の裏は當るも八卦當らぬも八卦、前途の事ナンカ分るもんかと云ふことになる。日進月歩の科學の力は、人絹の改良發達もさる事ながら、天絹生産過程の根本的變革も、起り得る譯である。たゞ此の儘進めば、遺憾ながら、エヂソンの豫言通り、今後三十年を出でずして蠶絲業は亡びゆくものと信ずる次第である。

○

蠶絲業更生策として、製絲より製織に進むべきを説く者がある。此の種の人は製絲家が養蠶家の爲に繭を買ひ絲をひくものと考へて居るのか知らん。製絲家が製織を始めれば、繭を買ひ絲をひいて原料を得るより、安くて重寶な人絹を使ふ樣になる事を御存じないのか。七月號の本誌黑岩君の論文は、此の邊の消息を語り得て十分である。

○

生絲の内地需要促進に關する意見に對しても一言したい。今更絹物の有難味を宣傳しなくつたつて、昔から『オ蠶ぐるみ』と云つて、日本では絹物を身につけることを贅澤の別稱として居る位その貴重さを知つて居る。ふ觀念がいけないつだ何だと言つて宣傳何？　その贅澤と云買へませんよ。下手て？　いくら實用品つて人絹の露拂ひをした處で、高くてはする事となる。

○

生産費の切下げも消費增加の宣傳も要するに人絹に比して或る優越性を保持する所に基調がなくてはならない。だから絹物の宣傳にも人絹に對抗する意識を含むべきであると思ふ。然るに敢て日本中央蠶絲會が懸賞募集して、久米正雄氏はじめオ歴々の選になる一二等の入選標語は

○絹の手ざはり絹の光澤
○愛せよ絹物榮ゆる日本
○絹を着てゐる春心

と云ふので、何れも人絹に對する優越性を宣傳してゐないから、之では木綿を排して、絹を着よと云ふ宣傳にしかならない。日本は世界一の生絲國であると同時に、世界第二の人絹國であることを忘れてはならない。私は次の數句を應募して何れも選に洩れたが、併し今でも自分の句の優越を信じてゐる。

○何と言つても本絹
○本絹使用は却つて經濟
○使ふほど値うちの分る本絹

○

蠶絲業の前途を卜するには、天絹が人絹に比して或る優越性を保持する事が前提であつて、若しハンデキャップが無くなるものとすれば、もう議論の餘地は無くなる。誰でも説く樣に、天絹は動物質人絹は植物質、其の動物質なる所に一種言ふべからざる趣味があるのであつて、蛋白質の合成が人爲で不可能であるかぎり天絹人絹とは其の本質を異にする譯である。だから問題はその本質に對するハンデキャップと、コストとの競爭にかゝつてゐるものと考へるべきではあるまいか。

○

繭價暴落對策としての生産制限の根據は何處にあるか。他に代替品のない生産物や、限産に依つて價格維持が出來、從つて收入減を防ぎ得るやうな機構になつてゐる産業ならいざ知らず、今日の養蠶業に對して生産調節を强ひやうとする事とは、其の必要の有無は別問題として、兎も角實行不可能の問題である。又繭の乾燥保管奬勵の意義も、對策として甚だ不徹底であり、之がやがて保管生絲の二の舞を演じないものと誰が保證し得よう。

○

『まア名案はないね』――之が眞相であるゝルーズベルト大統領が大童のニラ運動ですら、アメリカの景氣を恢復し得ないではないか。下手な對策を講ずるより放任するを以て無策の策なりと信ずる。併し役人と云ふ者は、無策放任と言つてすまされぬ所に惱みがあり、又民間團體等の運動も、騒げば騒ぎ得の世の中なんだから、國庫の財布をせびりとるの効果はある。

○

それにしても何とか、蠶絲業に對する國策はないものか。統制經濟流行の時世だ。何んでもかでも統制の强化で進まうとするのかそれもよからう。併しソンナ事で、蠶絲業の前途に對する不安は一掃されない。私は蠶絲業の前途に對して次のやうに、二樣の見解を持つて居る。

○

第一――今日の蠶絲業はシャイネストックの呼吸狀態にある。こゝ數年間は一服一泡の狀態を繰返すにしても、結局衰退の一路を辿り、轉業者續出し、養蠶は特殊事情の一部地方と、卓越せる經營者だけに殘されるであらう。

○

第二――天絹は化學絹絲を以て人絹に對抗する。從つて養蠶業はその經營方針に變革を來すけれ共、蠶絲業そのものは亡びないであらう。

○

右が樂觀もせず悲觀もせざる所以であるが、何れに轉んでも我々サラリーマンにとつては當分飯の食ひはぐれはなさうだ。殊に統制の强化はサラリーマンを要求することが益々多くなるから母校の卒業生の竇口に就ては心配せんでもよからう。

○

今月の漫語は題材を變へて偉らさうなオ託宣を竝べたが、愚見に對して早川教授の御叱正を得ば幸甚である。

（昭和九・八・三）

農村時局對策

山梨縣農會　吉川誠彦

最近數年間に亘る繭價の不況は、本縣の如き養蠶業が農業經營の中心組織をなしてゐる地方に於ては、農家の經濟上に相當深刻なる打擊を與へてゐる。殊に現下の狀勢では繭價の回復が容易に到來し難いのを見透してか、蠶絲業者が自ら桑園の整理減反を決議斷行する樣になつて來たのは珍しい現象である。

然るにこの整理減反された土地利用に對する方針が、農蠶何れの指導者にも定見がない。從來生産方面のみを見て消費方面を顧慮しなかつた指導者としては無理もないことであるが、元來經營と云へば各種の業態を綜合して設計した企業であつて、耕種とか、養蠶とか、養畜とか加工とか云ふ部門を獨立した形態として經營すると云ふ事は、既に農業經營の根本方針を過つたものと云はねばならぬ。

この意味に於て今後の養蠶經營は綜合的農業經營の立場から改善策を樹てるのでなければ、眞に蠶絲業の健實なる發達は望み得ないと思ふ。這般山梨縣農會に於て縣下の郡市農會長並に縣農會議員を召集して、蠶絲、米穀、負擔の三項に就て決議した概況を御知らせ致したいと思ふ。

一、蠶絲對策

繭價暴落に對する養蠶經營の合理的指導に關する件

蠶絲業對策には素より應急恒久の兩策に付き講究の必要あるは論なしと雖も其の養蠶業にありては家族經營農業の本質に立脚し左の如き基本的要件の下に行ふを以て指導方針とす

1、食料の自給は農家の生活安定の第一要義なるを以て養蠶經營に於ても食料の自給を原則として計畫すること

イ、食料自給計畫は地方の事情により、米、麥、雜穀、甘藷、馬鈴薯等の混用を主食として基準を立つること

ロ、養蠶偏重の地方に於ては食料自給計畫上必要なる耕地は整理桑園の跡地又は桑園の間作を以て之に充つること

ハ、此際桑園の整理を行ひ又施肥管理の改善に依り集約的に反當收繭量の增加を圖り生産費の低減と自然的減反の一部を補ふこと

2、家族の勞力を以て經濟的經營を行ひ得る範圍に於て可及的養蠶の規模（春、夏、秋各回の分量及回數）を限定し經營を安全ならしめ以て繭價低落の打擊の輕減を圖ること

3、不良桑園を整理し堅實なる養蠶經營の計畫樹立に際し整理桑園の代作物選定は養蠶との比較對照以外の經營條件をも考査し地方的に最も有利なるものを選定すること、例へば自家食料品以外棉花、畜産飼料、果樹、蔬菜、花卉等

4、桑園の肥料は主として自給肥料によるを原則とし有畜農業の組織とすること、例へば大豆粕、米糠、魚粉蛹等を直接肥料とせず家畜又は養魚の飼料として利用し又蠶糞蠶沙の合理的處理に依る自給肥料の增産

5、生産の輕減は重要なれども方法を誤らば所得減少の結果を招來することあるを以て左の事項を目標とし現金的生産費の節減を圖ること

イ、購入肥料を節減し綠肥栽培、堆肥、廐肥、木灰等の自給肥料を以て之れに代ゆること

ロ、雇傭勞力を節減し家族勞働を以て之れに代ゆること

ハ、農閑期を利用し極力購入材料の自家生産に努むること

ニ、技術の改良による生産增殖

6、屑繭、桑條の利用を圖ること

イ、屑繭を自家用として農閑期に製絲し又は眞綿の製作、手紡績絲に製造し自家用絹布を機織すること

ロ、桑條は燃料以外に條皮を製紙原料として利用すること

7、繭價が限界的生産費以下に低落しては養蠶は成立せず重要農産物たる蠶絲業の興廢は一に係りて繭價に存するを以て農業經營上の對策と共に左の事項に對し强力なる蠶絲業統制政策を斷行し官民協力を以て斯業の安定を期するを要す

イ、往年の帝蠶會社に類する有力なる半官半民の生絲輸出會社を設立し徹底的に生絲販賣を統制し長期輸出販賣約定に依り可及的價格騰落を縮少し絲價の安定を圖り同時に又販路を世界に求め宣傳開拓に努むること

ロ、製絲、養蠶、蠶種三者の關係を圓滿にし共同の利益を基調とし特に製絲部門と養蠶家との提携を合理化し委托製絲又は眞實なる特約協同經營等の方法により可及的絹絲の生産費低下と經營の安全とを圖る樣製絲業の統制改善を期すること

ハ、製絲及養蠶の經營方針を從來の如き一定の用途を目標としたる劃一主義より改め精粗種々の生絲を製し、國用の增進加工輸出の道を開く樣研究をなすこと

ニ、輸出統制の結果に依り需要の情勢に順應して養蠶を制限し繭價維持を圖ること

縣に要望

1、桑園の整理奬勵金の交付

2、代作奬勵金の交付

3、蠶糞蠶沙處理場の設置補助

4、産業指導機關の統制

政府に要望

1、生絲輸出統制の斷行

二、米穀對策

一、米穀統制法の運用に際し米穀移入縣たる本縣に於ては特に端境期前に於て必要數量の政府貯藏米の拂下を受け需給の關係を調節して消費者の負擔加重の輕減を圖られたきこと

二、出來秋の米價維持の爲め低利を以て米穀金融を講じ自家貯藏の方法を講ぜられたきこと

縣に要望

一、農業倉庫の增設に對し相當補助金を交付せられたきこと

二、此際政府貯藏米の安價拂下をせられたきこと

政府に要望

一、外地米の差別的移入統制を計ること

二、最低價格の保證等により金融の道を講じ米穀自家貯藏の範圍を擴大せられたきこと

三、負擔均衡に關する件

一、農家負擔の輕減は繭價暴落に際し愈々其緊要なることを痛感す此際新內閣に向つて既設の農村負擔調査會の審議促進を督勵し昭和十年度豫算に於て決行せられむことを要望す

千曲會員名簿に對する注文

篤之

本會員が、相互的にその動靜を知り、之れを抱けば、校門に遊びし頃を追想し得る。吾が會員名簿も、年を逐ふて膨脹し來り、號を重ぬる毎に體裁を整へて來たが、尙物足りなさが潜んで居るのを感ずる。

其れは、勤務場所と住所とが雜然と交錯して居る事と、卒業年次別にした編輯法の、然らしむるもので、此の編輯法は場合に依つて索引の必要が無いだけ便利だとも言ひ得ようが、私達が之れを繙く時、言ひ知れぬ反逆氣分をそゝるものである。千曲會員は、卒業の年次や、科別によつて差別の無い事は言ふまでも無い事である。其れをさもそれらしく見せつける配列法が悪いのである。だから普通一般に用ゐられてる樣にいろは順に改めそして卒業年次、科別を其の下に記し、而して住所を主とし、勤務場所を從とする樣な、配列に改めて、貰ひたいのである。

そうなると、現在の形式では都合が悪く、自然菊判にでもせねばならぬと思ふが、こんな改正は編輯部だけで充分考慮し得るものと思ふ。筆者が在學當時、校友會雜誌を菊判に改めた時も何の故障も生じなかつた。之れは本年から是非改めて貰いたい。選科、研究科も同列に入れた其の意志からしても、そう言ふ改良は次に來るべきものであると、誰しも想像し得る事である。編輯部が多忙で、その原稿整理が出來ないとあらば、筆者が原稿をつくつてもよい。これは是非改正して貰ひたいものである。

（七月二十一日記）

死んだ金澤丈也兄の生涯

S　Y　生

此の一文は故人が後年住んでゐた青森縣三本木町の三本木農學校に居られる鈴木雄七君（蠶十五）が親切にも筆者に寄せられた手紙を大體そのまゝにて記したもので彼の三十餘年の短かい歷史である。

彼が青森縣北上郡五戸町の資産家の長男として呱々の聲をあげたのは今から約卅一、二年前の事である。當時家は町でも屈指の資産家であり父も信用ある建築請負の技師として、諸官衙、學校等の建築にたづさはり可成の勢力を持つてゐた。女の子ばかり三人もあつたので待ちあ

ぐんだ頃生れ出たのが彼であつた。一家の喜びは大きなものだつた。勢ひ一家の寵兒たらざるを得なかつた。けれどもその喜びは長くは續かなかつた。金に淡白な性質に加へて、相場に手を出す樣になつた。やがてお定まりの家産の傾倒、事業の失敗等が打續き果は思ひ餘つて父は妻子を捨てゝ家出をしてしまつた。勿論負債の整理をしてある筈もなく、爲に債鬼は女子供とあなどり彼の田畑等を自由に整理するに至つた。然し氣丈夫な母は三人の女子と二才の丈也君を抱へて僅かの田畑を唯一の資産に子供の養育に腐心した。母は只此の長男の成長をのみ願つて何事もしのんで來た。斯くして小學校を終へ三本木の町内にある三木木農學校の養蠶科に入學した。卒業間際に病を得たので上田の學校の選科生として入學した。選科生活も三ヶ年を費し――多くの人は二ヶ年――只管に蠶絲業の闘士たらんとして勉學にいそしんだ。此の間にも益々經濟は困難になつて來た。僅か許りの田畑も殆ど學費に使ひ盡されてゐた。斯くて三年を修業して學校の世話で豊科町の蠶業取締所に赴任した。之が世の中への振出しであつた。

其後青森縣に歸り地方の養蠶技術員をやつたり、ある蠶種會社に勤めたりしたが、どちらかと云ふと母の手一つで甘やかされて來た我儘な性質と酒好きの爲からであらふ――環境と運命に歪められた性格――何れも永續きはせずに失職してしまつた。けれども青森市から妻（小學校に奉職してゐた）を迎へてからは家庭も圓滿に、本人も獨身時代とはまるで違つた樣に落付いた氣持になり酒なども其の量が少くなつたので、此のまゝで行けば明るい運命を開く事が出來るらしく好轉して來たのだが。運命の魔手は何處迄彼を引廻さうとするのか。結婚後二年と經たぬ中に妻は男の子を産んだが此の爲にか、豫てから發病中の肺患が重り、間もなく遂に不歸の客となつてしまつた。妻の死、彼にとつて之れ位大きなショックはなかつた。魂を奪はれた者の樣に、今迄出來る丈け慎んで來た酒を再び暴飲する樣になつた。母の戒めさへも全く効なく、失業と妻を失へるうつろな氣持を癒して呉れるものは只酒、酒の前に何物もなかつた。

斯くて彼の體を蝕み始めたものは、彼の蝕まれた精神であつた。

だが其間にも失業苦に惱まされてゐる彼はしきりに職を求めた。そして三木木の町内にある産馬組合の家畜保險員に採用され再び生氣ある人間に歸る事が出來懸命の努力を以つて事務に勵んだのである。所が一度蝕ばれはじめた體には病が入り易く、一寸した事から今年の二月頃風邪に冒されてしまつた。それだのに折からの決算期等を控えての事務多忙にその病身を推して出勤し、此の差迫つた仕事を何うにか片付け終つたのは北國では未だ〳〵うら寒い三月の中頃であつた。此時既に内部的に病勢は昂進し翌日からドット病床に臥したきり立つ事も出來ぬ迄に衰弱してしまつた。それ程迄に無理をして來たものである。病氣は喉頭結核である。老母の看護も甲斐なく食慾もなく又食を攝る事も不自由、體は衰弱の極に達した。遂に五月十七日、噫。あたら若き生命を既に幽明境を異にするの悲運に終つたのである。

斯くて一家の柱石は失はれて老母は今迄何の爲に生きて來たか、譯らなくなつてしまつた。

寄書された鈴木君が彼の靈を弔つた時彼の位牌を前にして僅か二才の幼兒をかゝへ失望落膽の極に倒れてゐる六十餘才の老母の姿を眺めては只々涙なしではゐられない。悲哀に閉され言葉も出なかつたと云ふ。

彼の一生は若人として死んで行くには餘りにも暗く陰鬱なものであつた。正直に云へば彼の學生時代には友人らしい友人も少くどちらかと云ふと學生としてはデカタンな、そして不自然な生活をしてゐた樣に思はれた。が歪められた家庭と運命に育まれた彼にとつては無理からぬ事であつた樣にも思はれる。遂に死んでしまつた彼を想ひ出し哀れな生涯を知つて同級の諸兄には云ふまでもなく同窓諸兄にも御同情を得て遣された老母と幼兒の爲に特に些の慰藉の情を表し、彼の冥福を祈りたい。

故加藤德四郎氏御子息和夫氏よりの書狀

拜啓　時候不順の折柄皆々樣愈々御清榮奉賀上候、此度は七月號千曲時報御惠與に預り誠に忝く拜見致し候處亦々小子の拙き禮狀御掲載下され誠に重ね〳〵の光榮に勿體なく唯々感泣の外無之家内一同謹みて厚く御禮申上げ候、本年は御校創立廿五周年を迎えられ記念事業として種々御立派なる御計畫を樹てられ着々として御進行誠に御目出度存じ上候

就ては父の死と共にこの名譽ある千曲會員たるの名を失ひ御仲間に入れて頂く資格は無之候へども何かの足しにして頂き度く目下の逆境とて思ふに任せず甚だ少額にて御恥しき次第に候へども金拾圓也振替を以て御送金申上候、御受納下されば候はゞ幸甚の至りと奉存候

先は御禮旁々御案内申上度如斯御座候

（七月十七日　本會宛）

御答と希望

千曲會會計係

時報七月號（五十二號）千枚漫語中會計に關する次の樣な御尋ね及御意見があつた。

1、前の二十周年記念計畫の際集めた金の始末は何う處理されたか

2、その時金を出さなかつた者に對して今回は何等考慮しないのか

3、境遇上會費納入困難者に對して支會長の具申に依つて免除又は延納を認める事にしては何うか

以上の1と2の御尋ね3の御意見の内御尋ねの方に對して係の者としては只だ代議員會の決議を忠實に實施して居り、その内容も既に時報に依つて御報告濟みではあるが實際に於ては不徹底の懸念もあつたから、昨年十一月代議員會の際此の點を最も力を入れて御説明申上げて今回醵出金を集める事の御承認を願つた心組だ。然れども代議員會議事錄全部が時報に載らず大部縮少してあつて全會員に徹底する事は尚困難の事情もあり得ると思つて、その點を時報第五十號（本年五月號）にも大體申上げて置いたから御覽願へば御尋ね1は御諒解願はれる事と思ふ。尚昭和五年及六年代議員會に於て議了された會計報告は昭和六年一月號、昭和七年二月號とにあるから御覽願度い。

御尋の2については前の二十周年の際會員より集めた金は今回の醵出金又は寄附金と異なり、特別會費として徴收したものであるから未納は永久未納とし本會は之れが集金に努力して居り集金せる場合には其本金に繰入れる事になつて居る。

次に3の御意見については御尤もな御意見と思ふ。現に上級學校入學者及び軍隊入營者にして支會長の具申に基き免除又は延納する事を得る内規が代議員會に於て認められて居る。此の内容を少しく擴張すれば足る事である。會費の出し得る者は皆出し、出し得ぬ者は正規の手續を了して出さぬと云ふやうになつたら誠に結構な事だ。今年の代議員會議に議題とし度いものだ。

序に申上げ度い事は會計係の集りに於て『終身會費を納めた者を終身會員として名簿中府縣別欄の部に該會員名の上部に〇印を附する事』を希望して居る。終身會員の名稱を附するには規則改正から始めねばならぬが係の希望として各位の御意見を伺ひ度いものである。

上田便り

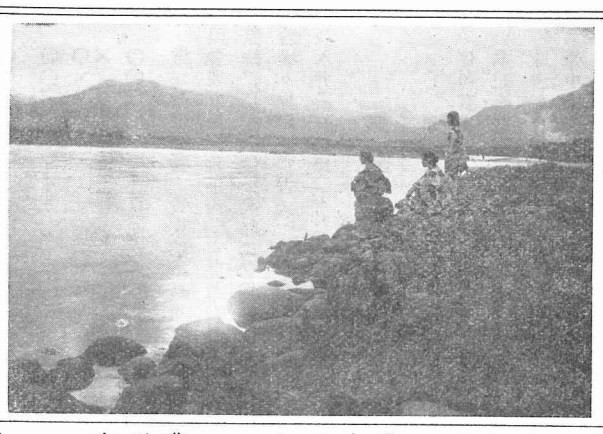
上田信濃兩繭絲の春繭取引數量　上田の上田、信濃兩繭絲の春繭取引は七月三日及九日迄で終了したが出廻數量四万五千百九十五貫、金額十五万一千八百六十八圓であつた。之を前年の八万百貫、四十九万八千八百九十一圓に比較すると驚くべき大減少である。

上小地方九繭絲の取引百万圓の大激減　上田商工會議所調査に依る信濃、上田、東北、川西、大屋、田中、大塚、丸子、依田窪九繭絲市場の昭和九年度春繭取引高並取扱金額を見ると白繭一九三、七八九貫、五四二、八二〇圓四五錢、貫當平均二圓八〇錢、黄繭七、七七〇貫、一六、三七四圓八三錢、貫當二圓一一錢、白黄平均二圓七七錢となり之を前年同期に比較すると白繭に於ては五二、二六四貫（前年二四六、〇五三貫）九四四、四四八圓四六錢（前年一、五一七、二六八圓九一錢）減で貫當三圓三七錢（前年六圓一一錢）減で黄繭も八、八七四貫（前年一六、六四四貫）七二、七三五圓八九錢（前年八九、一一〇圓七二錢）減　貫當三圓二四錢（前年五圓三五錢）減となり増減歩合は白繭數量で二一、三%、金額六四、二%　黄繭數量五三、三%、金額八一、六%の何れも減少となつてゐるので前年に比し上小地方養蠶家は實に百四万七千百八十四圓三十五錢の收入減を見てゐる譯で不況の程も思ひやられる。

祇園祭　上田市の祇園祭は七月十八日宵から十九日にかけて行はれた。幸ひにも雨は午後から晴れて各町の御神輿五十餘、三千の若衆が練り歩いた。此の祇園祭の白眉は午後三時頃から行はれた御神

輿の千曲川渡御であつた。大少の神輿が温電鐵橋下から飛込み千曲川の清流を乘切る様は實に壯觀であつた。

日支事變の慰靈祭　上田小縣出身日支事變に名譽の戰死を遂げた將兵二十五柱の慰靈祭は七月廿八日午後三時より上田招魂社に於て畑第十四師團長を迎へて上小の各名譽職、遺族、團體長、學校生徒分會員等多數參列、上小町村長會、上小神社協會、上小在鄕軍人分會主催のもとに盛大に執行され國幣中社生島足島神社手塚宮司齋主となり神職十數名に依り嚴肅にとり行ひ終つて畑師團長より遺族へ慰問の挨拶があつた。



夕涼み（千曲川畔）

（上田市—石坂寫眞舘撮影）

女青百名菅平へキャンプ　大日本聯合女子青年團の中堅女子青年天幕野營講習會は八月五日から九日迄菅平の大明神澤で催された。參加人員は縣下及縣外を合せて約百名である。

菅平及新鹿澤溫泉のキャンピング　菅平のキャンピングの好適場所は大明神澤と三日城である。前者は四阿山と根子岳の淺い谷合ひで後者は菅平川の沿岸にあり何れも潺々として流れる清冽な水に惠まれてゐる。尙溫電には貸天幕が五十張あつて一定の料金を以てキャンパーに貸付けてゐる。新鹿澤は溫泉場の附近湯尻川の沿岸がよい。

菅平のローンスキー　美芝の密生した菅平高原はローンスキー（芝スキー）にも最適地にてキャンピングと共に夏期のスポーツとして推奬し得るものである。菅平ホテルには芝スキーに使用するセルロイド張りのスキーが多數用意されてゐる

東京鐵道局懸賞當選コース　夏の旅は海よりも山へ—　日本の屋根と云はるゝ信州台地には上高地や日本アルプスを除いてもなほ訪ぬべく廻るべき高原や山々や溫泉がある。鐵道省では之等の處女地を廻るワンダラーの爲め三つの新コースを選定して八月末日迄汽車賃の割引をする事となつた。

一、淺間山麓廻遊と鳥居峠越え
發驛—上田（汽車）—眞田（電車）—菅平口—鳥居峠—新鹿澤溫泉—新鹿澤口（以上バス）—輕井澤（電車）—發驛（汽車）又は上記の反對經路
乘車賃六圓三十錢、通用期間六日

二、菅平高原廻遊
發驛—上田（汽車）—眞田（電車）—菅原高原—須坂（以上バス）—長野又は屋代（電車）—發驛（汽車）　又は上記の反對經路
乘車賃　六圓　通用期間七日

三、和田峠越え
發驛—上田（汽車）—別所溫泉—西丸子（以上電車）—徒歩二町—丸子町—下諏訪溫泉（省營バス）—發驛（汽車）　又は上記の反對經路
乘車賃　六圓　通用期間八日

徵兵檢査　上田市の徵兵檢査は八月三日に執行されたが壯丁三百十五名（內五十名は寄留で數字に入らず）甲種七十七名第一乙種二十二名第二乙種四十一名丙種二名丁種二十九名戊種二名トラホーム三名花柳病三名で合格率は二八、八％大體成績良好であつた。

上田夏繭初取引豫想外の高値　上田の夏繭取引は上田繭絲八月四日、信濃繭絲八月六日から開始されたが上田繭絲の初取引は出來高三百九十一貫天候不良續きであつたにも拘らず繭質は概して良好で二圓六十五錢を最高に最低二圓十錢平均二圓二十二錢十九掛見當で豫想外の高値を示した。

皆さんのためになるお話

或る日、汽車の中で、若い娘をつれたお婆さんと、信州人らしい青年との間に次のやうな會話がありました。

老婆『妾は長野の善光寺さんへ、娘と一所にお詣りに行つた歸りてございますが、折角信州迄來たのですから、どこかの溫泉宿でゆつくり泊りたいと思ひますが、どこが一番いゝでせうか』

青年『なる程、それは矢張り別所溫泉が一番いゝでせう。上田驛でおりて電車に乘れば僅か三十分で行かれます。第一あすこには有名な觀音さんがありますよ』

老婆『オヤ、別所といふ所には、溫泉があつたり、名高い觀音さんがあつたりする所でございますか』

青年『さうです。厄除の觀音さんです。何んでも今から千年も前に、地の中から火の玉と一所に現はれた觀音さんださうでその御利益は大したものです。毎日の參詣者も中々多く、殊に男や女で厄年の方はその厄除の爲にも澤山お詣りします』

老婆『それはいゝ事をお聞きしました。それでは今晩は別所溫泉に宿ることゝし、娘も今年十九で厄年ですから一所に行つてお詣り致しませう』

青年『殊にあなたは、善光寺さんのお歸りださうですから、尙更都合がよいわけですね』

老婆『それは又、どういふ譯ですか』

青年『別所の觀音さんは北向になつて居り、長野の善光寺さんは南向になつて居り、つまり兩方向き合つてゐる譯ですね。それで善光寺さんにお詣りしたならば、別所の觀音さんにもお詣りせねばならないと昔から言つて居るのです。私もさう言ふ譯で今から行く所です』

老婆『つまり善光寺さんだけでは、片詣りになつてしまふといふ譯でございますね。觀音さんを先にして、善光寺さんを後にお詣りしたらばどうなるでせうか』

青年『それはちつとも構ひませんです。汽車の時間の都合でさういふやうなお詣りをする方も澤山あります』

老婆『電車賃や宿賃はお高いでせうか』

青年『いゝえ、電車賃はタツタ三十五錢です。宿賃も二圓と言へばよいでせう。オヤ、もう上田驛です。あそこに大きな電車があるでせう。あれに乘れば直ぐ別所溫泉へ着きます』

老婆『どうも色々ありがたうございました。うちへ歸りましたら早速近所の方にもお話して、別所の觀音さんへお詣りに來るやうに申しませう』

母校ニュース

夏蠶實習終了　絲一の夏蠶飼育實習は七月三十一日を以て終了收繭量は約一八〇瓩であつた。本實習は珍しく冷涼なる爲め上簇中暖房を使用した。

本校産夏繭の品質　絲一の飼育實習に依る夏繭は日一一〇×支一〇五にて切歩一五％で例年より惡く解舒も降雨續きであつた爲め餘りよくない様である。

秋蠶實習開始　八月一日より蠶一の秋蠶實習を開始、擔任は山口助教授、平尾副手、濱村副手である。生徒數三十四名一名宛蟻量二瓦にて掃立は三日に行つた。

蠶三大山、鈴木兩君の渡滿　蠶三大山融、鈴木正一郎の二君は滿蒙學徒研究團に參加して渡滿する事になり七月十三日上田發にて出發した。七月廿四日撫順より左の便りがあつた。

酷暑之候諸先生には益々御健勝泰賀候私共二人は元氣で旅順、大連を經て今日世界に誇る炭坑の都撫順を訪れ申候、只今より奉天に赴く筈に候、先づは御報告迄、亂文御許被下度候

教婦養成科二年校外實習　教婦養成科二年生十四名は校外實習の爲七月二十三日夫々左記工場に入場した。實習期間は二週間である。

工場名	實習生氏名
長野純水舘	臼井和子　井上すい
上條理	關あぐり
田中製絲株式會社	西原藤藤田しつ子
和田りん	
依田社	荻原正次　春原さと
深町いつ	宮城久子
小諸丸純工場	清水藤江山崎みつ子
若林のち子	

紡織職員對一年の庭球試合　七月九日午後四時より小雨濕る母校コートに於て紡織科職員對一年の庭球試合を行つた。十組宛と云ふのだからテニスを知らうが知るまいが全部引張り出されて古今未曾有の珍試合が演ぜられたが結局左のス

コアで職員側の大勝となつた。

（上段は職員軍、下段は學生軍）

×× 小林（榮）――○○ 矢崎
× 甲田　　× 下世古

×× 今井　　○○ 矢澤
× 唐澤　　○ 岩本

○○ 新保　　× 佐藤
○ 大塚　　× 根岸

○○ 山田　　× 柳澤
○ 三宅　　× 岩崎

○× 津田　　× 諸岡
× 小松　　○ 松本

○× 目崎　　× 村橋
× 小林（清）　　× 尾和

○○ 小林（尚）――× 千吉良
○ 香山　　× 瀧澤

○○ 清水　　× 花岡
○ 野口　　× 小林

○× 岡　　× 福島
× 中澤　　○ 迫

○○ 石倉　　× 花岡
○ 林　　× 北澤

重なる來校者　貴族院議員男爵學術振興會理事松岡均平氏（七月廿五日）長野縣蠶絲課長高橋伊勢次郎氏、長野縣工業試驗場々長宗像宗吉氏、長野蠶業試驗場々長水井壽一郎氏（七月廿七日）

支部通信

東海支會總會

係の言葉　本記事は本年四月中旬に至り他の用件より始て客歳末支會より御發送せられ途中紛失せるを發見した。其れがため再度御送附を願ひ延引ながら今回漸く登載せし次第である。御宥恕を乞ふ。

拜啓　歳末も近づき愈々御多忙の御事と拜察仕候、陳者先般當支會總會開催に關しては一方ならぬ御配慮に預り特に林氏の御臨席を賜り候段厚く御禮申上候、地元大箸、戸倉兩氏の御盡力は絶大なるもの有之尚東京支會よりの原田兵衞氏昨年當支會より分離致候三重支會の篠田平三郎氏等の御臨席はこれに拍車をかけかつてなき盛會裡に終了仕候間此段御報告申上候

昨年度總會の決議により本年は靜岡縣に於て開催する事と相成居候に付十一月初旬大箸氏打合せの爲め御來訪の結果

一、期日　十二月二日

一、場所　靜岡縣見付町大孫旅館

と確定仕候

當日好天氣に惠まれ東より西より能ふ限り繰合せ爲し集る者客員會員を合せて二十四名新記錄に御座候、只地理的其他の事情により岐阜縣よりの出席者皆無なりしと新進會員の出席比較的少なかりしは遺憾に存じ候

列車到着時刻の關係上六時開會野澤會長の挨拶あり、次いで芝氏議長振り鮮かに進行中根會員會務報告後協議は入り申候（決議事項別紙の通り）、殊に當會は今迄地域も廣く年々會員數を增加致し健全なる成長を續け申候も千曲會の一縣一支會の主旨により昨年は三重縣の分離あり、本年又靜岡の分立決議あり、殘りは岐阜愛知の二縣と相成會員數約八十名に減じ申候も名稱は依然東海千曲會として本家の暖簾を守るべく候

此頃より腹の蟲の訴顔にて懇親會に移り申候、斯くなりては其處は同窓の心安さ和氣、茶氣、稚氣、元氣……氣の過飽和狀態にて時の移るを知らず、禿げたるあり、白髮あり、分けたるあり、將もあり、太りたるあり、細りたるもの、皆一心同體、翌朝大部分の士は可睡、法多の靈地を探り自動車の窓より小春日和の靜茶畑、蜜柑園を眺めつゝ、各自の方向に歸り申候。　以上

報告が遲く相成申譯無之候學期末も近づき仕事に追はれ知りつゝ延び〳〵に相成候段幾重にも御詫申上候（十二月廿七日東海千曲會長より理事長宛）

出席者氏名

林貞三（本會）　篠田平三郎（三重支會）
原田兵衞（東京支會）　戸倉八峯　大箸政平　佐々木峯二　岸勝彌　小林禮二
味知鹿三　佐藤壽雄　宮城弘　太田元（以上靜岡縣）　野澤泰治　大石卓壽
鈴木康之　芝荒雄　吉野健吉　中根眞一　萩原孫三　大久保秀治郎　山口貞周　今村貞鄕　平野秀雄　小林忠十郎（以上愛知縣）

協議事項

一、會則變更ノ件

第二條　母校中途退學者ニシテ本會ニ入會希望者アル場合ハ會長詮考ノ上許可スル事アルヘシ（內規）

千曲會準會員ハ特別ノ規定アル場合ノ外總テ正會員ト同樣ノ取扱ヲ受クルモノトス（內規）

第三條ヲ本支會ハ愛知岐阜兩縣ニ居住スル千曲會々員ヲ以テ組織ス、ト改ム

二、靜岡縣分離ニ關スル件

靜岡縣ハ本支會ヨリ分離シ千曲會靜岡支會トシテ獨立スルコトニ決定

三、次回總會開催地ニ關スル件

岐阜縣

四、役員改選

會長　野澤泰治
代議員　上原清夫（岐阜）　芝荒雄（愛知）　大久保秀治郎（愛知）
幹事　高尾歳次　吉野健吉　鈴木康之（以上愛知）　田中一男　後藤宰一　北澤周一（以上岐阜）

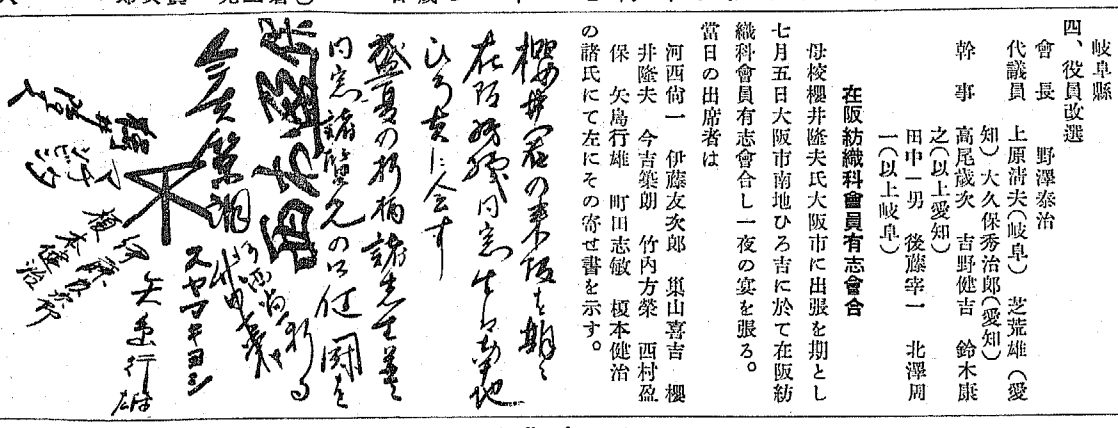
在阪紡織科會員有志會合

母校櫻井隆夫氏大阪市に出張を期とし七月五日大阪市南地ひろ吉に於て在阪紡織科會員有志會合し一夜の宴を張る。

當日の出席者は

河西尚一　伊藤友次郎　集山喜吉　櫻井隆夫　今吉築朗　竹內方榮　西村盈保　矢島行雄　町田志敏　榎本健治

の諸氏にて左にその寄せ書を示す。



福島支會總會

拜啓陳者去る七月十一日母校針塚校長殿の御臨席を得て飯坂溫泉泉州閣に於て當支會總會を開催候處出席者十五名に達し左記の通り役員決定候に付何卒御了承相成度御通知候也（下略）

追而事務所は前通り福島市蠶業取締所福島支所內に有之候

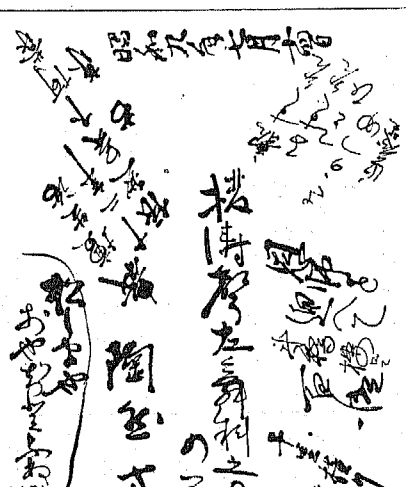
役員

支會長　高須　兵司
幹事　田附卯一郎　山本　薫
代議員　弓田　弘　富田庄三郎
豫備代議員　阿部　和　富田庄三郎
萬石安太郎　安倍　恒雄
笠原重龜

（福島支會長より本會宛）

宮城支會總會

針塚校長先生を御迎して七月十四日廣瀨の清流對橋樓の一角痛飲多食そぞろ昔に想を走らせ美形數匹伊那音頭に熱中以上御報告申上候（宮城支會より本會宛）左に當日の寄せ書を示す。



熊本支會總會

時は七月二十一日午後六時より熊本市の目貫上通り町の水谷食堂で夏季總會開會。まるで燒ける樣な暑さにも拘はらず集まつた面々を順序不同に書くと次の諸氏である。

太田愼一郎　深迫明　小川春男　高橋安雄　井手末馬　長野忠顯　相澤伸司
平山俊夫　加來芳文　坂口芳文　太田良信　小林重男　製絲科學生深井重一
全野本信次　養蠶科學生中村壽一郎

丁度市內の肥後製絲と縣の蠶業試驗場の方へ實習生が三名來られたのでこの歡迎會も兼ねて行つたのである。

集合人員は會員十二名出席歩合は五六%餘りよい方でも惡い方でもない。父母會長が病氣で來られなかつたのは一寸物寂しかつた。特に太田良信、加來芳文、坂口芳文の諸氏は新顔で始めて出席された。熊本千曲會總會と云ふても別に會議らしい事をする譯てない。只話して飲めばそれてよいのだ。又それが一番樂しみなのだ。會議をしてくだらない事を協議するよりも顔を見合せて冗談の一つも云へば何でも皆各個の意志は通じて仕舞ふので嬉しい。

近來關東中部地方の養蠶國を養蠶老大國と稱する樣になつて九州地方の諸縣を新進の養蠶地と云ふ樣になつた。この意味からでもあるまいが太田愼、高橋兩氏を除く他の會員は皆十回以後の卒業生だ。矢張りこれも新進の意氣漲るとでも申すのか。

洋食とビールを牛飲馬食（と云ふても僅か數皿の洋食に過ぎない）し和氣堂に滿ちて話の盡くる所を知らず散會したのは十時頃であつた。

實は本會開催に當り母校より教官の來熊を願ひ上田の方の模樣等に付き詳細拜聽すべく特に例年實習指導に來られる方

面に電文にて再三御來熊の時期を問合せたけれども遂に御返答の屆かなかつた事を熊本千曲會員一同が非常に遺憾に思つて居る。

左は當日の寄せ書である。

（小林重男氏報）

富山地方水害の便り

拜啓益々御清適之段奉賀候

扨て此度は當地水害に對し早速御見舞を賜り難有御禮申上候

災害は平野地帶に甚大の被害を及し候へ共本縣の養蠶地帶は山村を主と致し居り候關係上尚ほ春繭も既に出廻りを了し居る事とて斯業上に及したる直接の被害等は無之同窓關係に於ても被害者は全く無之候に付御安心被下度水害の善後對策等にて豫期せざる仕事を生じ係員は多忙を極め居り候有樣に御座候

先は早速御見舞を戴き御禮申上候と共に狀況申上度如斯御座候　草々

（七月十四日富山市佐藤良太郎氏より本會宛）

石川地方水害の便り

拜復當地稀有之水害に際しては御鄭重なる御見舞に預かり厚く御禮申上候

御承知の通り本縣の水害は白山を水源とする手取川の氾濫に因るものに有之能美郡を貫流する手取川の沿岸の慘狀は實に言語に絶するもの有之候

幸にも縣下の同窓生中には手取川附近に在住するもの無之從而同窓生並家族全部無事に候間御放念被下度候

先は御禮申述度如斯御座候　敬具

（七月十八日　北陸千曲支會長、絹村貫氏より本會宛）

秋田地方水害便り

拜啓　時下盛夏之候各位益々御清祥之段奉慶賀候

陳者今般當市水害に付早速御見舞に接し難有御禮申上候、幸ひ拙宅には何等被害無之無事消光罷在候間乍他事御放念被下度先者乍略儀以書中御見舞御禮迄如斯に御座候　敬具

（八月一日　秋田市奥田達雄氏より本會宛）

本會記事

支會長更迭

宮崎千曲會長左記の通り更迭せり

新任　穗坂小牧

退任　富岡泰

福島千曲會長は昨春以來缺員となり其間萬石安太郎氏が代理執務せられし處今回左の通り決定せり

新任　高須兵司

本會日誌

七月　九日　夏季校外實習生各科を通じ派遣に付關係支會長へ便宜取計方依頼せり

七月　十二日　昭榮製絲本庄工場在勤の佐藤雄次郎氏御逝去につき御遺族並に淺見支會長へ弔意を表せり

仝　　日　石川、富山、兩縣下の豪雨水害に對し絹村支會長及佐藤良太郎氏へ御見舞旁々支會員の狀況を照會せり

七月　二十日　北九州千曲會より所屬會員調を照會せらる、速に回報せり

七月　三十日　秋田縣下の洪水甚敷を以て奥田達雄氏へ御見舞旁々附近會員の狀況を照會せり

七月三十一日　岐阜縣郡上郡八幡町佐藤兼吉氏より綿羊及麻加工に關する照會に接し速時回答す

叙任辭令

昭和九年七月一日

公立實業學校長　山本辰五郎

陸シテ高等官三等ヲ以テ待遇セラル

公立實業學校教諭　小澄晋

仝　日比野一夫

陸シテ高等官六等ヲ以テ待遇セラル

昭和九年七月三日

地方農林技師　栗原章

十一級俸下賜

公立實業學校教諭　林周藏

七級俸當分千六百貳拾圓下賜

公立實業學校教諭　小澄晋

仝　日比野一夫

陸シテ高等官六等ヲ以テ待遇セラル

昭和九年七月三日

地方農林技師　栗原章

十一級俸下賜

公立實業學校教諭　林周藏

七級俸當分千六百貳拾圓下賜

昭和九年七月九日

地方農林技師　鶴田定平

八級俸下賜

昭和九年七月二日　從七位

菅澤隆三

仝　永田平

仝　勝又勝夫

叙正七位

昭和九年七月十二日

地方農林技師　青木針三郎

九級俸下賜

昭和九年七月二十日

農林技師　原田兵衛

陸叙高等官五等

地方農林技師　山本岩三郎

九級俸下賜

昭和九年七月十六日　正六位　山本辰五郎

叙從五位

昭和九年七月十九日

公立實業學校教諭　山口貞周

愛知縣西尾蠶絲學校教諭ニ補ス

昭和九年八月一日

陸軍步兵少佐正六位勳四等　谷弘

任陸軍步兵中佐

上田蠶絲專門學校教授　林貞三

陸叙高等官四等

公立實業學校教諭　田口富五郎

陸シテ高等官五等ヲ以テ待遇セラル

公立實業學校教諭　吉野健吉

陸シテ高等官六等ヲ以テ待遇セラル

廿五周年記念事業

第三回醵出金納入者（七月卅一日現在）

金拾圓　古川誠彦（蠶三）
金參拾圓（完納）　佐藤尚雄（蠶三）
金貳拾圓　二宮九二二（蠶四）
金拾五圓（完納）　鈴木泰市（蠶十三）
金拾圓（〃）　本間國夫（蠶十七）
金拾圓（〃）　田口兎平（蠶十七）
金拾圓（〃）　六川忠一郎（蠶十八）
金五圓（〃）　中島正喜（蠶廿一）
金五圓（〃）　坂口芳文（蠶廿一）
金貳拾五圓（〃）　丸山忠良（絲一）
金貳拾五圓（〃）　鈴木康文（絲二）
金貳拾圓（〃）　高橋康輔（絲七）
金拾圓（〃）　荒木康男（絲十七）
金拾圓（〃）　林秀門（絲十九）
金貳拾圓（〃）　小林良亘（紡二）
金拾圓（〃）　丸茂まさ江（準會員）
金五圓（〃）　川上連（〃）
金五圓（〃）　大瀧すみ（〃）
金五圓（〃）　安達たか（〃）
金五圓（〃）　岡宮靜子（〃）
金五圓（〃）　掛川泰子（〃）
金五圓（〃）　柳澤よし子（〃）
金五圓（〃）　山崎とも（〃）
金拾圓（〃）　加藤和夫氏

合計金貳百八拾圓也

第三回醵出金申込者（七月卅一日現在）

二十口（二名四十口、金額貳百圓也）
戸倉八峰（蠶二）　小川保（蠶二）
十口（三名三十口金額百五拾圓也）
野澤泰治（蠶一）　古東幹太（蠶六）
織田博（絲一）
八口（一名八口金額四拾圓也）
小林茂雄（絲一）
六口（八名四八口金額貳百四拾圓也）
吉川誠彦（蠶三）　佐藤尚雄（蠶三）
二宮九二二（蠶四）
松井清三（絲一）　有賀文雄（絲一）
高田茂重郎（絲一）　加藤善一（絲八）
白井武（紡六）
五口（三十七名百八十五口金額九百貳拾五圓也）
篠田平三郎（蠶一）　上原清夫（蠶一）
絹村貢（蠶一）　朝長勝二（蠶二）
藤原卓之（蠶二）　濱井壽夫（蠶二）
大石卓壽（蠶二）　小林國造（蠶二三）
坂田榮雄（蠶二）　寺島親雄（蠶三）
塚田柾春（蠶三）　田中康雄（蠶四）
三橋宣夫（蠶四）　中根眞一（蠶四）
吉村眞作（蠶四）　五島眞喜太（蠶四）
佐藤國一（蠶四）　白澤朝（蠶五）
後藤宰一（蠶五）　弓田弘（蠶五）
丸山武夫（蠶五）　中島靜太郎（蠶五）
稻石榮太郎（絲一）　鈴木誠一（絲一）
一志藏人（絲一）　田中三郎（絲一）
林部源三郎（絲一）　丸山忠良（絲一）
宮田鐵五郎（絲二）　鈴木康之（絲二）
杉野壽一（絲三）　小岩井桂三（絲三）
飯島直（絲三）　父母仙藏（絲四）
手塚芳太郎（絲五）　伊藤清（絲五）
長野忠顯（絲十七）
四口（三名百三十二口金額六百六拾四圓也）
大井學（蠶六）　小山二郎（蠶六）
佐藤俊三（蠶六）　味知康三（蠶七）
小野修二（蠶七）　上林多兵惠（蠶七）
天野武良（蠶七）　橋本武光（蠶七）
又木善義（蠶七）　前田龜雄（蠶七）
窪田禎作（蠶七）　本谷良雄（蠶七）
石原石司（蠶八）　日野光平（蠶八）
原清志（蠶九）　門平潤一郎（蠶九）
後藤仙彌（蠶九）　吉田隆雄（蠶十三）
中島眞（蠶二十）
市川清男（絲六）　西山諫治（絲七）
西川梅治郎（絲七）　高橋康輔（絲七）
小宮山太助（絲八）　尾澤義朗（絲八）
三好彌市（絲八）　寺本秀吉（絲九）
本山正美（絲九）　塚田卯平太（絲十）
林直助（絲十）　恒川芳保（絲十）
倉橋琢而（絲十）
小林良亘（紡二）
三口（四一名百二十三口金額六百拾五圓）
稻生得三（蠶十一）　谷川海三（蠶十二）
仲内靜（蠶十二）　宮下京三（蠶十二）
中山吉二（蠶十二）　前田雅弘（蠶十三）
宮澤勇（蠶十三）　鈴木泰市（蠶十三）
沼田週造（蠶十三）加々井精喜（蠶十三）
宮川繁治（蠶十三）　山岸武（蠶十三）
松原幸彌太（蠶十四）永井勝末（蠶十四）
樋村忠義（蠶十四）　宮本豊彦（蠶十五）
中村岩人（蠶十五）　森戸晋（蠶十五）
櫻井弘吉（蠶十五）　小林貫一（蠶十五）
阿部茂一郎（蠶十五）
大塚重藏（絲八）　神戸敏夫（絲十二）
赤津辰男（絲十二）禰島鋼治郎（絲十二）
白井要範（絲十二）　荒井猛（絲十二）
櫻井卓三（絲十二）　小平光雄（絲十三）
松井正次（絲十三）　上田岩男（絲十四）
湯澤稔（絲十四）　關喜四郎（絲十四）

五島小太郎（絲十五）佐藤壽雄（絲十五）
國貞忠男（絲十五）
西村　武男（紡四）　岡　豊次郎（紡五）
吉津　柏（紡五）　椎屋　藤良（紡七）
中村治三郎（紡十）

二口（六十一名百二十二口金額六百拾圓也）

木内茂雄（蠶十六）　藤旗和人（蠶十六）
小林辰夫（蠶十七）　本間國夫（蠶十七）
田村　亮（蠶十七）　田口亮平（蠶十七）
淺見安治（蠶十七）　濱　節陸（蠶十七）
倉澤一二三（蠶十七）金　相藏（蠶十七）
茂山孝保（蠶十七）　千村敬三（蠶十八）
細川俊雄（蠶十八）　中澤喜雄（蠶十八）
尾崎宗觀（蠶十八）　藤井四郎（蠶十八）
六川忠一郎（蠶十八）太田　元（蠶十八）
松野外史（蠶十九）　齋藤軍二（蠶十九）
白川孝昌（蠶十九）　都築清治（蠶二十）
渡邊正男（蠶二十）　福地　進（蠶二十）
都　貝華（蠶二十）　杉浦卓三（蠶二十）
吉田太郎（蠶二十）
神津輝人（絲十六）　中木　禎（絲十六）
黑澤裂裟彥（絲十六）西田勇三郎（絲十六）
松田　偉（絲十七）　荒木康男（絲十七）
高須正高（絲十七）　石井公男（絲十七）
茂原重雄（絲十七）　西尾重郎（絲十八）
荒木愼藏（絲十八）　松井憲二（絲十八）
黑木藤雄（絲十九）　延命幸次（絲十九）
秋山武一郎（絲十九）小口伊祐（絲十九）
關三四郎（絲十九）黑岩京治郎（絲十九）
本間茂銳（絲十九）　吉川知則（絲十九）
藤森明美（絲二十）　白井美明（絲二十）
平野正夫（絲二十）　三宅　勳（絲二十）
六川忠行（絲二十）　角田勝郎（絲二十）
坂　求（紡九）　西村盈保（紡十）
小林忠十郎（紡十）　川島信夫（紡十一）
山名享四郎（紡十）勝田清三郎（紡十一）
齋藤猪之作（紡十二）　加藤和夫氏

一口（六名六口金額參拾圓也）

濱井成一（蠶二十）　坂口芳文（蠶廿一）
手塚達郎（蠶廿一）
清水一郎（絲　一）　伊藤　競（絲　一）
藤井爲五郎（紡十三）

準　會　員

一口（十一名十一口金額五拾五圓也）

名取　園　岡宮　靜子　西原　芳
佐藤かち子　川上　連　小林みよ子
近藤たけ子　柳澤よし子　橋本あい子
大瀧　すみ　西澤　やす

合計人員　二百三名
合計口數　七百五口
合計金額　參千五百武拾五圓也

一、左記會員次の如く訂正す

七口、高須　兵司（蠶　一）
二口、小野寺克治（蠶十九）
五口、小山田道男（絲　十）

會費領收報告

（七月三十一日迄分）

昭和九年度通常會費納入者

（○印は蠶絲學雜誌代共）

清水達太郎（蠶　一）　宮島　庄平（蠶七）
○荻野　轍間（蠶八）○宮川　繁治（蠶十三）
藤井　四郎（蠶十六）　秋山　俊雄（蠶廿一）
中島　正喜（蠶廿一）　水谷　清（蠶廿一）
蓮沼　光治（蠶廿一）　手塚　達郎（蠶廿一）
○百瀨　正（蠶廿一）　山岸　恒一（蠶廿一）
西澤　良一（蠶廿一）　町田　博（蠶廿一）
池田　俊郎（蠶廿一）　丸山　忠良（絲一）
○竹内眞喜雄（絲二）　井上　一郎（絲五）
小井土英二（絲廿一）　榮喜（絲廿一）
白井　四良（絲廿一）　松浦　彰義（絲廿一）
北澤　常雄（絲廿一）　長治（絲廿一）
新村　五郎（絲廿一）○一之瀨　茂（絲廿一）
林　正平（絲廿一）　中曾根　誠一（絲廿一）
熊谷　俊三（絲廿一）　金丸　功（絲廿一）
香山　清和（紡三）　柳澤　信義（紡十）

千曲會規則第九條第三項による未納會費收入者

（○印は蠶絲學雜誌代共）

小山　庸人（蠶　一）○折茂正太郎（蠶　一）
○上原　清夫（蠶　一）○本間　直人（蠶　一）
○山本辰五郎（蠶　一）○波多野千里（蠶　一）
○矢島　剛（蠶　二）○大石　卓壽（蠶二）
北村　一郎（蠶　二）○藤原　卓之（蠶二）
朝長　勝治（蠶　二）○宮坂　正彥（蠶二）
○淺見　好雄（蠶　二）○八木　誠政（蠶三）
○峯村眞一郎（蠶三）○小見　益男（蠶三）
○芝　荒雄（蠶三）○吉川　誠彥（蠶三）
○青木針三郎（蠶三）近藤　正巳（蠶三）
中山　鑑一（蠶三）　伊藤　清（絲一）
○川合軍之助（絲一）　小林　茂雄（絲一）
○松井　清三（絲一）　森　淳太郎（絲一）
○一志　藏人（絲一）○矢田部忠吉（絲一）
○岸　益吉（絲二）○山本　薰（絲二）
○甲斐　孜（絲二）　永井　榮（絲二）
竹内眞喜雄（絲二）○府川　作平（絲二）
○甲斐　堅（絲二）○中川　熙（絲三）
岡部　彌平（絲三）

終身會費完納者

林部源三郎（絲一）　登坂　忠吉（蠶三）
中根　眞一（蠶四）

入會金納入者

牧島　章吾（蠶廿一）

完納者

金五圓也
池内　眞吾（蠶九）　高野　賢造（蠶廿一）

未納會費納入者

金貳圓也　高橋　善吾（蠶一）
金七圓也　五島眞喜太（蠶四）
金八圓也　島倉　督造（絲九）

昭和九年度蠶絲學雜誌代納入者

中根　眞一（蠶四）

弔慰金報告

故上原安夫氏弔慰金追加

金貳圓也　宮城藤　雨宮　金雄
金壹圓也　宮城藤　藤井四郎　木内茂雄
竹内衞佐雄

合計金六圓也

故金澤丈也氏御子息悅也氏よりの禮狀（本會宛）

拜啓　父丈也存命中は並々ならぬ御厚情を蒙り尙不幸に際しては御懇切なる御弔辭と過分の御供物迄賜り且又葬儀の節は遠路態々御會葬被下成御懇情之段難有御禮申上候、本日は、證信軒本覺德顯居士の忌明に當り略儀乍ら紙面を以て御禮申述度如斯御座候　敬具

青森縣北上郡三本木町初田
七月十九日　男　金澤悅也

故佐藤雄次郎氏御遺族よりの禮狀（本會宛）

雄次郎葬儀の節は早速御鄭重なる御弔電を賜り御芳情有難く謹みて御禮申上候

群馬縣北甘樂郡磐戸村
七月二十四日　男　佐藤保二郎
妻　佐藤蕃二枝
兄　佐藤幸太郎

故三谷徹氏記念資金寄附者

金五拾圓也　加美　好男
金拾圓也
高尾　才次　水井壽一郎　宗像　宗吉
井上　柳梧　大瀧照太郎　古谷　榮藏
林　貞三
金六圓也
有賀　文雄　松村　季美　浦生　俊興
倉澤　美德
金五圓也
山陽　支會　岡本　榮一　合田　信一
櫻井　汎　宮原　秀人　菅野　喜通
岡部　彌平　長野　忠顯　豊部　正巳
小林　茂雄　鈴木　康久　荒牧伊勢美
若林新一郎　小岩井桂三　三輪　輔
窪田　潤
（長谷川みゆき　關　にし
伊藤はる　山崎　政江）
金參圓也
池田忠次郎　林部源三郎　渡部　亘
小林　つね　手塚　雄一　森　ふじい
小川　保　奥村　好一　宮田鐵五郎
長見　公祐　彼末　武猪　隅倉　美義
林　清市　湯澤　稔　畠山茂忠太
水谷　鄕一　石川　健丸　齋藤　菊雄
野口新太郎
金貳圓也

金貳圓也
故上原安夫氏弔慰金追加
金壹圓也　宮城藤　雨宮　金雄
竹内衞佐雄
合計金六圓也
故金澤丈也氏御子息悅也氏よりの禮狀（本會宛）
拜啓　父丈也存命中は並々ならぬ御厚情を蒙り尙不幸に際しては御懇切なる御弔辭と過分の御供物迄賜り且又葬儀の節は遠路態々御會葬被下成御懇情之段難有御禮申上候、本日は、證信軒本覺德顯居士の忌明に當り略儀乍ら紙面を以て御禮申述度如斯御座候　敬具
青森縣北上郡三本木町初田
七月十九日　男　金澤悅也
故佐藤雄次郎氏御遺族よりの禮狀（本會宛）
雄次郎葬儀の節は早速御鄭重なる御弔電を賜り御芳情有難く謹みて御禮申上候
群馬縣北甘樂郡磐戸村
七月二十四日　男　佐藤保二郎
妻　佐藤蕃二枝
兄　佐藤幸太郎
故三谷徹氏記念資金寄附者
金五拾圓也　加美　好男
金拾圓也
高尾　才次　水井壽一郎　宗像　宗吉
井上　柳梧　大瀧照太郎　古谷　榮藏
林　貞三
金六圓也
有賀　文雄　松村　季美　浦生　俊興
倉澤　美德
金五圓也
山陽　支會　岡本　榮一　合田　信一
櫻井　汎　宮原　秀人　菅野　喜通
岡部　彌平　長野　忠顯　豊部　正巳
小林　茂雄　鈴木　康久　荒牧伊勢美
若林新一郎　小岩井桂三　三輪　輔
窪田　潤
（長谷川みゆき　關　にし
伊藤はる　山崎　政江）
金參圓也
池田忠次郎　林部源三郎　渡部　亘
小林　つね　手塚　雄一　森　ふじい
小川　保　奥村　好一　宮田鐵五郎
長見　公祐　彼末　武猪　隅倉　美義
林　清市　湯澤　稔　畠山茂忠太
水谷　鄕一　石川　健丸　齋藤　菊雄
野口新太郎
金貳圓也
牧野　春雄　藤井　料　原田　英三
井上　一郎　熊谷　和子　小山田道男
松田　敬三　高橋　伊作　遠藤　正彥
島倉　督造　本間　國夫　櫻井　弘吉
安達　たか　白井　要範　西川梅次郎
堀江　尙　櫻井　卓三　中田太郎
小宮山太助　香山　清和　好士　泰造
鷹野　誠一　高橋　康輔　福田鐵之助
金壹圓五拾錢
佐藤　茂　中島　茂
金壹圓也
佐藤　金六　大久保　直　桐本他喜男
渠原　章　佐藤　義助　鍵谷　傳
服部彌一郎　沓掛　久雄　勝又　勝夫
山本　とも　小松　茂久　玉木　勝彰
安川　寛　宮城　博　小坂田　亮
川上　連子　小林　重男　太田愼一郎
掛川　泰子　米澤　保正　内藤　次郎
工藤一二三　山崎　傳　岡宮　靜子
柳澤よし子　山内　龍一　原　茂

謹告

故三谷徹君は東京蠶業講習所及上田蠶絲專門學校に職を奉ずること三十有餘年一意專心子弟の教養と製絲學の研鑽とに盡瘁せられ我蠶絲業界に貢獻せる功績の多大なるは普く人の知る所なり。今や業界の非常時に際し同君に尙期待する所極めて大なるものありしに不幸昨夏病を得療養是努められしも其の効なく去る三月四日東京に於て長逝せられたるは誠に痛惜の情に堪へざる所なり。茲に一同相謀り君の功績を永遠に傳へ且は御遺族慰安の一方法として汎く資金を募集せんとす。希くは發起人の微衷を諒せられ左記要項御承知の上奮て御賛助あらんことを。

昭和九年七月

一、醵出金額　金壹圓以上
一、應募期限　昭和九年八月末日迄
一、醵金拂込場所　上田蠶絲專門學校內故三谷徹君記念資金管理者林貞三宛（振替貯金口座東京四三三四一番）御鄕里へ建碑其他　詳細は實行委員に一任願ひたし
一、使途
一、御送金　受領の上は領收書を送附す

發起人氏名（五十音順、○印は實行委員）

阿形　輝司　有賀　文雄　岩淵　平介　○井上　柳梧
石倉　新十郎　内田　浩　大瀧照太郎　岡　德治郎
沖　濤治　織田　博　金子英雄　○蒲生　俊興
○倉澤　美德　佐藤　利一　佐藤春太郎　下田　穣
清水寛孝　竹内興三郎　田口　敏夫
高木三治　坪井啓作　○高橋伊勢次郎　長岡哲三
針塚長太郎　早川直瀨　原田親雄　野口新太郎
肥後俊彥　藤本實也　藤崎卓彌　○林　貞三
本多岩次郎　○松村季美　○水井壽一郎　○宗像宗吉
吉野文藏　吉澤彌吾　和田仙太郎　遠藤保太郎

小林　良亘　宮野　保夫　庭野明之助
神戸　敏夫　白井　四良　片岡　志な
橋本あい子　町田　正直　坂田　榮雄
松井　正次　市原　文雄　篠原　善次
牧野金治郎　安田　辰巳　伊藤　幸枝
佐藤　彰二　竹内衞佐雄　和田　晋
大瀧　すみ　四方　定雄　飯島　六
荒木　康男　關　三四郎　東家　明秀
望月　弘　延命　幸次　滋野　文雄
小笠原猥一　宮入　誠一　大池　登
太田　正治　岡島　末吉　小島　求
黑澤裂裟彥　正木　章三　手島　孝一
萩野　喜次　中木　武　田口喜一郎
赤松　興一　宮城　忠夫　後藤　政之
細井　滿　彰　小池　武子
小林　代　泰　新野　武雄　内山　鶴雄
市川　ミス　橋本　キヌ　鈴木　泰市
結城　鎭男

會員動靜

（八月一日現在）

（轉宅、轉勤の御通知は速かに、なるべく勤務先名、役名、住所を記せられたし）

都　筑　貞　吉　職　（住）上田市上紺屋町六六二七
朝　倉　昇　蠶　一　（勤）朝鮮平安南道鎭南浦府
佐藤雄次郎　蠶十一　昭和九年七月十日死亡せらる。謹んで哀悼の意を表す。

氏家　忠次　蠶十四　（勤）宮崎市　郡是製絲株式會社蠶事所宮崎支所
坂田　武　蠶十六　岡崎市　日龍蠶種株式會社
高瀬　毅一　蠶十八　（勤）富山市縣廳內　富山縣蠶業取締所
竹內　直人　仝　村駐在　（住）群馬縣多野郡北橋村
今井　武四　蠶十九　（勤）長野縣下伊那郡山本村　下伊那郡養蠶業組合山本
宮城　薫　仝　（勤）長野縣上伊那郡伊那町　長野縣蠶業取締所伊那支所
鷹野　貞雄　蠶二十
高田　茂重郎　絲一　（勤）石川縣江沼郡河南村字別所　日本絹織株式會社二天工場
栗栖　忠士　絲十　（住）廣島縣山縣郡安野村來見
青木　友彌　絲十一　（勤）大阪市北區中之島二丁目十番地　日本棉花株式會社
根津　建　絲十八　（勤）長野縣上伊那郡伊那町　蠶聯社生絲共同施設組合所
非上　熊保　絲十九　中島と改姓　（勤）德島縣麻植郡鳴島町　筒井製絲株式會社鳴島工場
林　英雄　絲廿一　（住）高松市松島町一丁目
大矢　健次郎　紡選一　（勤）朝鮮釜山府大倉町四丁目　釜山稅關
佐藤　一　紡　二　（住）上田市鷹匠町
保々　鐵三　紡選十一　（勤）關東州錦州會南門外、大谷ホームスパン研究所
丸山　力藏　紡十一　（勤）宮崎縣延岡市　旭ベンベルグ絹絲株式會社機織部
大川　猪之作　紡十二　齋藤と改姓
關　にし　敎二　（勤）三重縣鈴鹿郡龜山町　龜山製絲株式會社
近藤　タケ　敎二　（勤）今治市外雷田村　日東製絲株式會社

新刊紹介

今回會員碓氷茂氏が、**繭市場問題研究**てふ著書を公にされた。之は蠶絲業經濟研究會が『繭取引の現狀と其の理想に關する研究』なる問題を捉へ分擔して研究し相互の檢討を終つたものから順次發表した著書の第三輯である。即ち第一輯は野崎清氏著蠶繭の生產と其の消費、第二輯が西田峯吉氏著乾繭取引の現狀と將來で第三輯が本書となつた譯である。

繭市場は現在重大なる轉換期に立つてゐる。その將來は考へねばならぬ焦眉の問題である。然も本問題を取扱つた著書は絕無の樣である。會員碓氷茂氏に依つて本書を得た事は繭取引界に於ける暗夜の警鐘であり同時に本會の誇でなければならぬ。敢て會員諸賢の一讀を御奬めする次第である。因に定價は八十錢發行所は東京市神田區錦町一ノ一明文堂、頁數一二四頁である。目次を示すと次の如くである。

一、總說　二、繭市場の現在あるまゝの姿　三、繭市場の現在の地位　四、繭市場の展開　五、繭市場の資本關係　六、繭市場の防衛　七、沒落への軌道　八、靜岡縣に於ける繭市場問題　九、結論　附錄一、繭市場一覽　附錄二、繭市場定款例

編輯室より

◇—今月號は蠶絲業不況對策特輯號とでも云ひ度い樣にそんな方面の記事が集つた。それから支會の記事が急に增加したのも珍しい事である。

◇—會員の御死去せられた方に對し、追悼記事の外に寫眞を載せ度いものである。各支會に於て其の骨折が御願ひ出來れば幸甚である。

◇—限られた豫算でより以上木紙を發展させる唯一の方法は廣告である。

勿論我々も其の方面に對しては常に努力しつゝあるが會員諸氏に置かれても御手近に適當な向があつたら御配慮願ひたい。特に會員の御廣告は別の意味も含んで歡迎するものである。

◇—母校は暑中休暇になつた。海へ山へと涼を追つて行つた人も相當あるだらうが金に絲の薄い自分達は何處へも行けない。每日暑い家の中でごろ〳〵してゐる。暑中休暇があつてうらやましいと云ふ人もあるかも知らんが、自分にはそんなうらやまれる御身分とは瓣思つてゐない。

御來田のお土產は
みすゞ飴　杏ゼリー　杏晒水飴　杏羊羹　信濃そば
上のフルーツ　チョコレート　黑羊羹　クルミ羊羹　果物類　雜誌
上田市松尾町
上飯島商店
電話二六〇・二五四

御宴會に　御會食に
レストラン
香青軒
明朗な洋室　落付いた
和室（數室）
上田市袋町　電話13番

千曲會指定旅館
上村ホテル
上田市海野町
電話三二七番

紡織、蠶絲、レーヨン、電氣、理化學其他諸機械器具、冷凍機械裝置、設計及製作
旭工業商會
正會員　飯島貞雄
東京市芝區田村町三ノ七
電話芝（四三）一七二八

暑中御見舞申上げます
鹿兒島縣志布志町
薩摩製絲會社志布志工場
甲斐孜
本橋万三郎

京染
於博覽會一等賞金牌受領
染賃が今迄の半額以下
御一報次第（御年齡記入）京染新柄見本と營業案內を御送りします　それに依つて御好を御覽下さい
有名な京染が御家庭から京都染元直接に注文が出來る樣な便利になりました　染元直接なるが故に染賃が半額以下で出來ます
まだ御存知ない御方は是非一度御試し下さい
德岡の京染はナゼ安いか　御客樣……京染問屋德岡直接だからです
外の京染はナゼ高いか　御客樣……註文取……地方京染店……京染問屋だからです
白生地類は卸値で差上げますから地方より二三圓安く御手に入ります
御注文先より御禮狀每日續々到着
各府縣產業組合御締約染元
京都市下京區高辻通大宮西入
營業課目
京染　呉服
白生地　類
西陣織　物
京染屋　問屋　合資會社
德岡總本店
振替　大阪　六三六二八　廸岡　一五七四六
電話　下　二九一六　ニ　ッ　イ　ロ
小店員募集　申込次第委細通知す